

組織学会通信

No.91

2022. 9. 20

【大会関係】

【1】2022年度組織学会研究発表大会報告

2022年度組織学会研究発表大会は、東北大学主催で、福岡路先生を実行委員長として、2022年6月4日（土）、5日（日）に開催されました。

残念ながら、今回も新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、4回目のオンライン開催となりました。地震などの天災の懸念もあり大学の施設利用すらままならない中で、福岡路実行委員長をはじめとする東北大学実行委員会の先生におかれましては、オンライン大会に向けて多大なご尽力をいただきました。当日も東北大学の先生方や学生さんが、オンラインルームのホストや運営スタッフとして大会を支えてくださいました。大学院生セッションと並行して、発表を終えた大学院生さんと参加者とが交流できるルームが設定されるなど、これまでの大会にはなかった新しい試みも導入されました。

オンライン大会に関する経験が、主催者の側でも、また参加者の側でも蓄積されたことにより、かつて散見された各種のトラブル（e.g.発表者の無断欠席、発表直前での入場、聴衆の消音設定忘れ）も、前回の研究発表大会に比べれば、かなり減ったように思います。他方で、ご自身で調べていただければ解決するような問題について事務局等に問い合わせるといったことは今回も確認されたようです。今後、年次大会及び研究発表大会がどのような形で開催されるか、現時点で確定的なことは申し上げられないのですが、どちらになるにしても学会員の皆様には、大会を裏で支えてくださる実行委員会や事務局のご苦勞について一考いただいた上で、行動していただければ幸いです。

いずれにしましても、上記すべての関係者のおかげ様で、大きなトラブルもなく盛況のうちに研究発表大会を終えることができましたこと、心より御礼申し上げます。

研究発表大会の初日は三会場で研究報告が行われました。一日目の午前は大学院生セッション、午後から研究発表セッションと基調講演、二日目は一日かけて研究発表セッションが行われました。大学院生セッションは大会委員である司会者と発表者によって進められました。またここでは、上記の通り、発表を終えた大学院生さんと参加者とが交流できるルームが設定され、セッション後も活発な議論が繰り広げられておりました。大変素晴らしい試みであったと思います。研究発表セッションは25分間、発表者が自由に時間を使っていたくという形で進められました。

一日目の午後の基調講演では、福嶋実行委員長が司会をされ、アイリスオーヤマ大山健太郎社長のご講演が行われました。経営者としていかに環境を認識し、時代の流れを読むか。経営者としての現体験なしには語ることのできないエピソードに溢れた、濃密な1時間でした。

一日目の最後のセッションは、高宮賞の受賞式と総会でした。高宮賞には著作部門1点、論文部門1点(2名)、総計3名が受賞することになり、高橋学会長からオンライン越しに賞状と盾が授与されました。その後、会員総会が行われました。また夕刻以降には、(1) 研究と生活の両立、(2) 研究フィールドの見つけ方・入り方、(3) 今日の発表の振り返り・明日の発表に向けて、と題する3つの懇親会会場(オンライン)が用意され、それぞれのルームに多くの学会員が参加し、熱い議論を交わし、また交流を深めました。

二日目の午前中は研究発表セッション、午後の最初に高宮賞セッションが行われ、2組の受賞者から20分ずつスピーチをいただきました。その後、研究発表セッションが続けられ、16時30分に全工程を無事に終了することができました。

2日間の長丁場において、PCの前に座り続け、管理運営を行ってくださった東北大学の実行委員会の先生方には御礼申し上げます。大変お疲れ様でした。

次に大会委員会の活動について御報告いたします。研究発表大会のオンライン開催決定を受け、大会委員会は応募された原稿をもとに審査をし、発表の可否を決定いたしました。本大会での発表の採択数は56件、不採択数は2件(形式不備などにより)で、採択率は昨年より少し高い96.55%となりました。

また大会委員会は例年通り、大学院生セッションで審査を行い、「ドクトラル・コンソーシアム」(略称「ドクコン」)参加メンバーの選出を行いました。ドクコンは、次代の若手研究者育成を目指す取り組みで、年次大会前日に開催されます。研究発表大会における大学院生セッションでの報告の中から大会委員会が選出を行い、大会終了直後に「インビテーション・レター」をご送付しておりますが、今年度も5名の大学院生をドクコン参加者として選出いたしました。

冒頭でも書かせていただきましたが、図らずも、4回連続でのオンライン大会となりました。「オンライン慣れ」が進みつつあるとはいえ、通常であれば起こり得ない各種のイレギュラーな事態への対応、難しい意思決定に直面することも何回かございました。これらをなんとか乗り切れたのは、各主催校の実行委員会の先生方のご尽力、また常に前向きにご対応くださる大会委員会の先生方がいたからです。また大会委員会の活動をバックアップしてくださった高橋会長をはじめとする理事の先生方、そして何よりも常に包括的かつ的確なアドバイスを下さる事務局の樋口様の献身なくしては不可能だったと思います。こ

の場をお借りして深く御礼申し上げます。

***2023 年度組織学会年次大会（武蔵大学）のお知らせ**

2023 年度組織学会年次大会は、2022 年 10 月 1 日（土）、2 日（日）に、武蔵大学にて開催されます。今大会は『対話としての経営学』と題する、実に魅力的なプログラムとなっております。その他、編集委員会セッション、大会委員会主催のランチョン・ミーティングなども企画しております。それぞれのセッションの内容は、時間をかけて練りこまれた質の高い内容となっておりますので、期待してご参加いただければと思います。

組織学会大会委員会担当理事 井上 達彦

2022 年度組織学会研究発表大会 開催校挨拶

2022 年度組織学会研究発表大会は、6 月 4 日（土）・5 日（日）の 2 日間、昨年に引き続きオンライン形式（Zoom 利用）により開催されました。

開催をお引き受けした時から、対面開催を模索してきました。しかし 2021 年 12 月の時点で新型コロナウイルスの収束に確信がもてなかったため、5 回目となるオンライン開催を決定いたしました。その後、2022 年 3 月に仙台で震度 5 強の地震が発生し、会場として予定していた大講義棟が使用不能となるほど被害がでたので、あとから振り返ると、オンライン開催としておいてよかったと胸をなでおろした次第です。

オンライン開催になった分、実行委員会は内容を充実させることに努めました。特別講演では、東北を代表する経営者であるアイリスオーヤマ株式会社代表取締役会長の大山健太郎氏よりご講演を賜りました。大山会長のご希望もあり、対面とオンラインを組み合わせたハイブリット形態で、かつ質疑応答の時間を長くとするという形で開催することにいたしました。当日は闊達な質疑応答があり、時間が足りないほどでした。また 2 日目の会長セッションでは高橋会長に著作権や研究倫理に関する昨今の状況についてお話いただき、学会として今後の方針をお示しいただきました。

またオンライン学会では会員の交流の機会が少ないというご意見を踏まえて、大学院生セッションの後に「アフターセッション」の会議室を作り、1 日目の大会後に 3 つのテーマで「テーマ別懇親会」を開催いたしました。懇親会には各部屋に 10～30 名程度の参加があり、研究者と生活の悩みを話しあったり、先輩から研究についてのアドバイスを受けたりと、活発な交流が図れました。

学会としては、大学院生セッションで 13、研究発表セッションで 43、合計 56 と、昨年より若干少なめでしたが、参加者数（参加登録人数）は 505 名で、盛況な学会であったと思います。開催準備にあたって多大なるご助力をいただきました事務局の樋口様、および大会委員会の皆様方には、心より御礼申し上げます。ご参加いただいた会員の皆様にとっ

て、参加してよかったと思える学会であったなら、主催者として幸甚の至りです。

新型コロナウイルスの感染も徐々に落ち着きを見せ始め、対面の学会の再開が期待されます。他方で、5回のオンライン学会開催を通じて、オンラインの良さも実感できたと思います。今後は対面とオンラインとを使い分けながら、学会活動がより活性化されていくことを、心より期待しております。

2022年度組織学会研究発表大会実行委員長(東北大学) 福嶋 路
実行委員会・開催校一同

【2】2023年度組織学会年次大会のお知らせ

2023年度組織学会年次大会を、以下の通り開催いたしますので、会員の皆様には、是非ご参加いただきたく宜しくお願い申し上げます。

日 時：2022年10月1日(土)・2日(日)

開催校：武蔵大学 ※「対面」での開催を予定しております。

統一論題：「対話としての経営学」

今回は「対話としての経営学」と題して、以下のコンテンツより構成される予定です。

- (1) 研究分野の専門家による「対話形式」のセッション(15セッション)
- (2) 組織科学編集委員会セッション
- (3) ランチョン・ミーティング及び大会委員会セッション
- (4) 基調講演
- (5) 特別セッション

2023年組織学会年次大会では、学会員の方々に専門分野以外の領域との接点を提供することを目的に「対話」というキーワードを設定いたしました。「リーダーシップ」、「マーケティング」、「イノベーション」などの領域での専門家同士がセッションのテーマに関し対話形式にて議論を交わしていただきます。それと同時に、異なる研究分野を研究中の学会員の方々にも対話にご参加いただくことで、新たな気づきを得るきっかけにしていただけだと考えております。具体的には、15のテーマセッション(1セッションは80分)を設置しました。セッションでは、組織学会の会員だけでなく、心理学など隣接領域の研究者や実務家も登壇いたします。

基調講演では、『キャプテン翼』の著作権ビジネスから見る日本の漫画アニメの更なる可能性」と題し、『キャプテン翼』のライセンス管理会社の株式会社TSUBASA代表取締役 岩本 義

弘 氏と『キャプテン翼』の初代編集者の株式会社 MISAKI 代表取締役 鈴木 晴彦 氏にご登壇いただきます。

当日は上記に加えて、論文投稿の活性化というテーマでの「『組織科学』編集委員会セッション」、学術書の出版を考えている研究者を対象にした「ランチョン・ミーティング（学術書籍出版への道）」及び「大会委員会セッション（学術書籍出版を考える研究者のためのピッチ・セッション）」などのプログラムも用意しております。

そして、大会の最終には、特別セッションとして「経営学の道具箱」と題した企画を設けております。このセッションでは、『組織科学』第54巻4号特集号「経営学の道具箱Ⅰ」、第55巻1号「経営学の道具箱Ⅱ」特集号の執筆者にもう一度集結していただき、特集号では書けなかった「道具の長所と短所」、「上手い使い方」、「まずい使い方」を説明していただいた上で、「道具の組み合わせによる新しい研究の発展」に関する議論を行います。

本大会では、学会員が専門領域以外の関連セッションに参加する機会を広く提供するために多くのセッションを設定いたしました。登壇者同士の対話だけでなく、学会員の方々とともに多面的な討議の機会になれば幸いです。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

なお、大会に関するお知らせにつきましては、大会専用ホームページ (<https://confit.atlas.jp/guide/event/aaos2023nenzi/static/outline>) にて随時掲載いたします。

2023 年度組織学会年次大会 実行委員長
武蔵大学 伊藤 誠悟

【3】2023 年度組織学会研究発表大会のお知らせ

2023 年度組織学会研究発表大会は、2023 年 6 月 24 日（土）・25 日（日）の両日、京都産業大学で開催される予定です。京都産業大学での開催は 2007 年以来となり、久々に本学にお越しになる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。本学にて組織学会を主催できることを、改めて喜ばしく存じております。

言うまでもなく新型コロナウイルスの感染はいまだ収束を確認できず、予断を許さない状況です。他方で、大会は対面開催が可能であると判断し、研究発表大会では 2019 年以来となる対面での開催を予定しております。なお、懇親会についても対面での開催を目指し準備しておりますが、なにぶん不確定な要素が多く、現時点で懇親会については開催を明言できない状況であることをお詫び申し上げます。

内容につきましては例年の研究発表大会のとおり、自由論題による発表が中心となります。通常通り、大学院生セッション、研究発表セッションともに実施ができるように準備

する所存でございます。来年には研究発表を通常通り公募いたしますので、会員の皆様におかれましてはご準備のほどよろしくお願いいたします。

不確定要素が多い中におきましても、会員の皆様にご満足いただけるような研究発表大会となりますよう、実行委員会一同、鋭意努力いたしますので、どうぞご理解とご協力の程、よろしくお願いいたします。

2023 年度組織学会研究発表大会（京都産業大学）実行委員会

【4】ドクトラル・コンソーシアムについて

6 月の研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会が選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」（ドクコン）にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクコンはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクコンご参加の意思確認をいたします。ドクコン参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクコンは、いわゆる Paper Development Session です。ドクコン参加者は、全員が『組織科学』仕様の（投稿規定に則った）論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクコン提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクコン終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。

そして、ドクコン開催日の夜（年次大会前夜）は、ドクコン参加者のご希望にできるだけ沿えるよう、数人のシニアの学会員をお呼びして、懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手ごかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

今年の年次大会（神戸大学）がオンライン開催となったことに伴い、ドクコンもその前日にオンラインで開催をすることになりました。それに伴い、例年とは異なる方法での開催となります。コロナ禍の影響は免れませんが、若手研究者を育成しようとするオーガナイザーの先生方の熱意は潰れません。

ドクコンに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクコン「インビテーション・レター」への最初の一步となります。

大会委員会

【 2022 年度 組織学会高宮賞 】

2022 年度組織学会高宮賞は、以下の通り決定いたしました。

【著書部門】

受賞者：受賞者：服部 泰宏（神戸大学）

著書名：『組織行動論の考え方・使い方—良質のエビデンスを手にするために』

（有斐閣 刊）

【論文部門】

受賞者：勝又壮太郎（大阪大学）、金 勝鎮（現所属：大阪経済法科大学）

論文名：「市場制約による段階的な機能向上：

スマートフォンの画面サイズはなぜ少しずつ大きくなったのか？」

（組織科学 Vol.54 No.2）

2022 年度組織学会高宮賞 審査報告

審査委員長 新宅 純二郎

担当評議員 浅羽 茂

沼上 幹

水越 康介

2022 年度の組織学会高宮賞は、以下に示すとおり、著作部門 1 点、論文部門 1 点で計 2 点が選出されました。

著書部門

服部 泰宏『組織行動論の考え方・使い方—良質のエビデンスを手にするために』

有斐閣、2020 年 9 月。

論文部門

勝又壮太郎、金 勝鎮「市場制約による段階的な機能向上：スマートフォンの画面サイズはなぜ少しずつ大きくなったのか？」（『組織科学』2020 年 Vol.54 No.2, 62-76）。

受賞された皆さんには心からお慶びを申し上げます。慣例ですので、簡単に審査のプロ

セスと授賞作品のご紹介をさせていただきたいと思います。

まず、審査プロセスについて簡単に報告させていただきます。今回、審査の対象としたのは、著書部門は2点、論文部門は4点がそれぞれ審査対象となりました。1つの作品について各々5名の学会賞委員が作品を読んで評価し、その評価をもちよって、3月17日に開催された学会賞委員会で協議いたしました。その結果として、この2点が学会賞としてふさわしいということで全会一致の結論を得ました。

服部氏の『組織行動論の考え方・使い方—良質なエビデンスを手にするために』は、組織行動論の研究が発展して多種多様な研究が輩出し、当該分野の研究者でもその全体像を見渡すことが難しくなっている中で、組織行動論の研究蓄積を俯瞰し、そのフロンティアを示すとともに、近年しばしば課題として取り上げられる「リサーチ・プラクティス・ギャップ」の解消に向けた提案を行っています。服部氏の提案とは、一言でいえば、実践家が経験や勘に基づいて抽出する「しろうと理論」(lay theory)と、研究者が紡ぎ出す「科学知」を「合わせ鏡」のように利用することで、研究者と実践家が相互補完し合いながら、現実世界についてのより豊かな理解を紡ぎ出すことができるのではないか、というものです。

高宮賞の審査対象の要件の一つとして「組織科学研究の奨励に資するものであること」が含まれています。近年の高宮賞の著書部門の受賞作はいずれも骨太の実証研究であり、優れた実証研究を著書という形で世に出すことは、いうまでもなくその要件を満たすものです。一方、本書は、これまでの受賞作とは異なる志向を持っており、組織行動論というひとつの研究分野の研究をレビューしたうえで、新たな研究方向を示すというものです。本書の中間部にある組織行動論の伝統的トピック並びに新しいトピックについてのレビューは、研究者を志す人々を惹きつけ、かつその指針を示すという意味で、組織科学研究の奨励に資するものと評価されました。また、経営理論のレリバンスが問題となっている中で、それに取り組む指針が、説得力がある議論に基づいて展開されていることから、本書は組織行動論を中心とした組織科学研究を奨励する役割を果たすことになること、審査委員会では高く評価しました。

一方、審査委員会では、研究者と実践家との関係性のデザインが具体的な指針にまで落とし込まれていないといった意見や、そこからどのような知識や理解が生み出されるのか、実証的に提示すべきではないかといった意見も出されました。著者である服部氏には、今後、本書で提案された、研究者と実践家との関係性のデザインの実践プロセスやその成果を積極的に発信することを通じて、「組織行動研究のレリバンス」向上に対して、さらなる貢献を果たすことを期待したいと思います。

勝又・金の論文は、製品の漸進的な機能向上が、技術・コスト要因ではなく、消費者の認識によって引き起こされるメカニズムを明らかにしています。本論文の着眼点は、消費

者は、ある製品機能を絶対的な基準で評価しているのではなく、その時点で上市されている製品群を見て形成される、ある種の相場感覚で評価しているのではないかというものです。この問題意識に基づいてスマートフォンの画面の大型化を取り上げて数理分析し、画面の相対的なサイズが消費者の評価に対して逆U字の関係にあることを示しました。

本論文の優れている点は、第1に、問題意識に対する適切な事例選択にあります。スマートフォンのサイズは、技術・コスト的には一気に機能を向上させることができたにも関わらず、業界として漸進的に変化しており、消費者側の認識のファクターを明らかにするのに適した事例です。さらに、この事例は消費者の認識の仕方を検証するための数値データを取得できるという点でも適切な事例だと言えます。

第二に評価できる点は、本論文から得られる理論的、実務的インプリケーションの潜在的な大きさです。本論文は、企業間の同質的な競争のエスカレーションが消費者の相対的な認識からも起こる可能性を示しています。同様の現象は、他の製品、業界でも十分起こりえるものでしょう。逆に、企業が消費者の認識と上手に歩調を合わせることによって、技術開発競争や同業者とのインタラクションを超えた新しい競争のステージを作り出すことができるかもしれません。

本論文にも不足している点はあります。本論文は、数理モデルを使いながらも本質的には事例研究であるので、論理を導き出すロジックと反証可能性の入念な検討が重要になります。その点で、画面の大型化が進んだ背景の分析、他の製品特徴との交互作用、近年最適サイズの増加幅が逡減傾向にある現象の説明などに関する踏み込みが弱く、物足りない面もあります。今後は、他の製品、業界、製品特徴で同様の傾向が見られるかどうかを検証し、一般化につながるさらなる議論を深めることを期待したいと思います。

審査委員長 新宅 純二郎

2022 年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶

— 著書部門 —

『組織行動論の考え方・使い方：良質のエビデンスを手にするために』

(有斐閣 刊)

神戸大学 服部 泰宏

組織学会高宮賞に選んでいただき、本当にありがとうございます。この本の出版時点において、「学会賞受賞の対象になるかもしれない」などということは、露ほども考えていま

せんでした。正直に申し上げれば、今もなお、少し戸惑っています（笑）。

とはいえ、組織行動領域で研究をしている仲間たち、またこの領域の研究者となることを目指す若い世代の皆さんに、是非とも届けたい明確なメッセージや想いがあってこの本を出したことは事実です。その意味で、学術書籍として評価をしていただき、多くの方々に手に取っていただいたこと、素直に嬉しく思っております。

受賞者セッションでも申し上げたのですが、私がこの本の主テーマである「経営学のレリバンス」の議論に初めて触れたのは、初めて参加したアメリカ経営学会のセッションにおいてでした。多くの研究者、実践家が集うセッションにおいて、元プレジデントの Denise Rousseau が、彼女が自らのプレゼンを、“I have a confession to make. There are many studies that I have devoted my heart and soul to that have been completely neglected by practitioners.”から始めた時は、なかなか強い衝撃を受けたものでした。既存の組織行動研究のパラダイムの中で成果をあげ、トップランナーの地位にある彼女（ら）が、自らがよって立つ科学コミュニティのあり方を批判するということ自体に、新鮮な驚きを感じたのです。当時まだ 20 歳代だった私は、彼女らの自己批判的な姿勢、しかも批判のための批判ではない建設的な姿勢に、研究者としての 1 つの理想を見た思いがしました。

上記の原体験から 10 年ほどの間、経営学が実践に「役立つ」とはどういうことかという問題について、私なりに積み重ねた文献レビューと思索の成果を、私の専門である組織行動論の領域に絞って議論しようと試みたのが本書です。現在は、そこからもう少しだけ進んで、「一般性/普遍性を目指して生み出される実証主義的研究の成果は、現実の組織における個別的な問題の解決に対して、いかなる意味で貢献しうるか」という問題を追いかけています。それは例えば、「施策 A の導入が社員の離職意識に対して与える効果量が X、実際の離職に与える効果量が Y である」という実証研究を手にした私たちは、優秀な社員 K さんが離職するかもしれないことに思い悩む上司 A さんに対して何ができるのか、といった問題です。とても素朴ですが、とても難しい問題です。

話を戻しましょう。経済学部の学生だった頃、クルーノ競争とかコブ=ダグラス型生産関数といったものこそが「科学」だと信じていた私は、ひよんなことで手にした Chris Argyris や Douglass McGregor, Frederick Herzberg らの書籍に心を奪われ、この世界に入門してきました。そして、そのような黎明期の研究者の（素朴だが力強い）研究に浸りきっていた私に、再度、衝撃を与えたのが、先に紹介した Denise Rousseau らの議論だったわけです。奇しくも彼（女）らは、黎明期の研究者たちの後継世代にあたります。では、Rousseau らの後継世代である私たちには、何ができるのでしょうか。皆さんは、どうお考えでしょうか。

2022 年度組織学会高宮賞 受賞者挨拶

— 論文部門 —

「市場制約による段階的な機能向上：スマートフォンの画面サイズはなぜ少しずつ大きくなったのか？」

(組織科学 Vol.54 No.2)

大阪大学 勝又壮太郎

大阪経済法科大学 金 勝鎮

この度はまさに身に余る賞をいただくことになり、光栄な一方、大変恐縮しております。毎年多くのすぐれた論文が発表されている中、私どもの論文がこのような賞をいただけるというのは少々気が引けるところはありますが、少なくない方に、我々の論文を面白いと思っていただいたということ、そして、審査委員の先生方から、授賞に値する、という評価をしていただいたことは、まさに望外の喜びでございます。

私の指導する博士課程の学生だった金勝鎮君との論文を評価していただけたのも嬉しく思っています。この論文はもともと金勝鎮君の集めていたデータと私が集めていたデータを合わせて面白い実証ができそうだとということで、2人で書いていたのですが、書いている間、そして修正している間もとても楽しく執筆できた珍しい論文でした。匿名の査読者の先生からも「議論が面白い」というコメントをいただいたことを今でも憶えております。

私は10年以上組織学会の会員ではありますが、隅の方にいる立場だと思っておりまして、実はこのような賞をいただくことになるとは、連絡を受けるまで期待しておりませんでした。昔の話ではありますが、もともと経営学についてほとんどわからないまま大学院に入り、新宅純二郎先生、高橋伸夫先生をはじめとする先生方、先輩方、同期、後輩の多くが会員だったということもあり、少しでも追いつくべく勉強するなかで組織学会に入会したわけですが、先生、先輩、後輩、皆様から、温かくご指導いただき、根気よく見守っていただいたこと、大変感謝しております。

先生方、先輩方からのご指導、今は教員として活躍されている同期や後輩、皆様から、大変多くのことを学ばせていただいたこと、この場をお借りして御礼申し上げます。恩返しというには足りないかもしれませんが、今後も微力ながら、学会、そして分野に貢献していきたいと考えております。(勝又壮太郎)

この度は、栄誉ある高宮賞を頂戴し、感激にたえません。大変光栄に思っております。私はオンラインレビューデータ、特にテキストデータに着目し博士課程から研究し続けてまいりました。勝又先生と一緒に消費者観点に着目したイノベーションの進展について研

究することができ、大変貴重な経験になり、勉強になりました。企業のイノベーションにおいてそのコモディティ化や解決の鍵は消費者の変化、いわゆる市場の動的な理解が重要であることが本研究の示唆点であり、それがデータから検証できたことはすごく嬉しく思っております。

また、本研究を高く評価していただいた審査委員会、組織学会の会員先生にも心から感謝申し上げます。この様な荣誉ある賞を頂戴したことは、暖かい激励とこれからへの期待が込められているものだと思います、気持ちを引き締めていきたいと存じます。今後も皆様のお力添えを頂きながら、これまでのように頑張るのみと考えております。皆様の期待に応えるためにも、これからも精進して参ります。今後ともご指導賜りたく、宜しくお願い申し上げます。(金勝鎮)

【新入会員紹介】

2022年度(第18期)には、以下の正会員61名、準会員(個人)33名、準会員(団体)3社が入会しました。また、準会員から正会員へ会員種別を変更した会員は2名でした。

【総務関係】

【1】年会費納入のお願い

当学会は2022年9月1日より2023年度(第19期)に入っております。年会費として正会員の方は12,000円、準会員・個人の方は8,000円のご納入をお願いいたします。

詳細なご請求につきましては、既に会員の皆様へお送りしております「2023年度(第19期)年会費のご通知」のとおりです。

1. 口座振替(自動引落)の方

9月27日にご指定の口座から振替いたしますので、お確かめください。お支払い手数料は当方にて負担いたします。また、口座振替入金事務手続き後に領収書を発行いたします。こちらは手続き上の関係で確認までお時間を頂戴いたしますので、11月上旬発送予定となります。

2. 請求書をお申し込みいただいた方

今年度分の請求書は、2023年4月の発行・送付となります。

期間内に上記の支払方法へお申し込みいただいていない方には、従来どおり、ゆうちょ銀行の「払込取扱票」をお送りしておりますので、窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い会費処理等で、運営上の問題が発生しております。会員の皆様には事情をご理解いただき、何卒速やかなお支払いをお願い申し上げます。

【2】大会出席・委任状送付のお願い

2023年度組織学会年次大会では、2022年10月1日(土)に会員総会が開催されます。会員総会は、組織学会の重要な議決機関です。また、今回の会員総会は、特定非営利活動法人としての総会も兼ねております。特定非営利活動法人の総会開催には正会員の5分の1以上の出席が必要とされております。正会員の皆様方には、是非ともご出席いただきますようお願いいたします。

2022年度組織学会年次大会が「オンライン大会」となりますのに伴い、会員総会も「オンライン開催」となります。

やむを得ずご欠席の場合には、学会ホームページより「委任状」をご提出くださいますようお願い申し上げます。ご欠席の可能性がある場合にも、委任状の提出をお願いいたします。委任状をお送りいただいた上で総会にご出席された場合、委任状の総数から出席人数を差し引きます。

総会出席、ならびに委任状の送付は、すべての正会員の皆様の意向を確認するための措置です。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

【2023年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

＝ 記 ＝

A) 英文論文の校正支援(1件当たり5万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1件当たり5万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において40歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低2年間は再応募で

きないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。
- ③ 締切は年3回(12月・3月・6月)設けます。2023年度は、2022年12月2日(金)、2023年3月3日(金)、6月2日(金)を期日とします。
締切後の1ヵ月後を目途にお知らせいたします。
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の17時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から1年以内に投稿することが望まれます。投稿後は、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を組織学会に提出してください。
- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり10万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で40歳未満の正会員である共同研究を対象として、1件当たり10万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で40歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望まれます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長2年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ⑤ 締切は年1回(3月)設けます。2023年度は、2023年3月17日(金)を期日とします。

- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から1年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。
- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3部）を組織学会事務局に提出してください。

【 事務局より 】

【1】口座振替結果状況について

会費の口座振替(自動引落)は、三菱 UFJ ニコス株式会社(NICOS)の収納代行サービスを利用しております。そのため、内容確認のためにお時間をいただきますので、何卒ご了承ください。

【2】会員情報の登録変更について

会員データ登録内容(所属、住所、電話、FAX、メールアドレス等)に変更が生じた場合は、必ずご本人様から直接事務局へ、組織学会ホームページより「会員情報変更届」をご使用のうえお早めにご連絡くださいますようお願いいたします。

※連絡方法は、電子メール(soshiki@rio.odn.ne.jp)をご利用ください。

【3】大会開催前後の連絡について

年次大会・研究発表大会の開催(土・日)において、事務局員は会議運営および諸準備のため、前日の金曜から現地入りしております。また恐縮ながら、翌月曜日は代休日となります。その間、事務局宛の電話・FAX・メールを確認することができません。ご不便をおかけいたしますが、よろしくお願い申し上げます。

なお、次の2023年度組織学会年次大会(武蔵大学)は、準備の都合上、金曜日のご連絡はお受けすることができません。

組織学会通信 第91号

2022年9月20日

発行 特定非営利活動法人 組織学会
事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-5-2
三菱ビル 地下1F 171区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>